



茶箱作りは作業工程の数が多く、1年たってもまだ携われない工程もあります。その分、茶箱作りの奥深さや楽しさを感じますし、すべての工程を1人前にできるようになれるように、頑張っていきたいと思います。
(齊藤良太郎さん・竜也さん)



技術を受け継ぐ「新たな担い手」

前田製函所では、1年前から齊藤良太郎さん(㊟、田野口区)・竜也さん(㊟、地名区)兄弟が見習いとして働き始めています。

将来的に独立することを目指しながら、前田さんや先輩の持つ技術の継承に日々奮闘しています。前田さんも「まだまだ2人とも序の口だけど、茶箱への思いを持って取り組んでくれていて、とてもうれしい。独立できるようになるまで、たくさん苦労しながらひとつずつ覚えていってほしい」と期待を寄せます。



乾燥させた杉板を茶箱のサイズに切り出す前田さん。大きく分けて12種類もの作業工程がある茶箱作りでも、特に木材の選定や乾燥、パーツごとの切り出しといった工程では、前田さんの経験が光る。



木と、真摯に向き合う。

茶箱製造工の前田宥さんが静岡県優秀技能者に

高い技術を有し後継者の育成に尽くした者を表彰する「平成29年度静岡県優秀技能者」に、茶箱製造工の前田宥さん(下長尾区)が選ばれました。

茶箱の特長を生かした新たな用途での需要が拡大する一方で、次世代の担い手への技術継承も始まっています。



◀町長に受賞を報告した前田さん(12月6日)。

「材」を見極め手作りの逸品

前田製函所(下長尾区)の2代目として、16歳から茶箱を作り続けてきた前田さん。現在は従業員5人とともに、年間4千から5千個ほどの茶箱を製造しています。

使用するのは、町内で伐採製材された杉板。天日干しで乾燥させてから、パーツごとに切り出します。

「杉は一本ごとに性質が違う。それどころか、同じ木であっても端先と根元で勝手が違うから、どの部分にどの板を使うかを見極めていかないと。これについては、60年以上作り続けてきた今でさえ上手くいかない時があって、やっぱり木は生き物だなあって実感するよ」。

段ボールや紙袋などの梱包材の普及によって、本来の用途である茶葉の流通用としての需要は減少傾向にあるといいます。しかし、杉板の状態から製品として完成するまで一貫して妥協を許さない前田さんの茶箱は、さまざまな方面から支持を集めています。

「実は5日ぐらい前にも、わざわざ名古屋から買いに来てくれた人がいて。茶箱の良さを理解

してくれる人、欲しいと言ってくれる人がいる。茶箱の製作をまだ続けようと思えるのは、それが一番の理由かな」。

茶箱作りへの変わらぬ信念を胸に、前田さんは作業台の前に立ち続けます。

進化し続ける茶箱

近年、前田製函所で作られる茶箱は、優れた防湿・防虫効果を生かしたインテリア製品やさまざまな用途へと、販路を拡大しています。

茶箱の新たな需要の掘り起こしを主導しているのは、東京都にある「インテリア茶箱クラブ」です。同社では、収納を兼ねた腰掛けや布生地を張った宝石箱などの「インテリア茶箱」を、大手百貨店を中心に販売しているほか、表面にレーザーでデザインを刻印した「レーザー茶箱」も、贈答用の外箱として人気を集めています。また同社では、平成25年に町内に支社を設置し、茶箱産業の存続を目指して後継者育成に向けた取り組みも始めています。

不変の技術が詰まった茶箱は、時代の変化に適応しながらも、多くの人にその魅力を届け続けています。

